
WORKING!! 今日から何故かワグナリア

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WORKING！！ 今日から何故かワグナリア

【Nコード】

N1531BA

【作者名】

原石

【あらすじ】

種島ぽぷらのクラスメートであり親友の嬉野龍馬が、個性的なワグナリアの面子とドタバタと仕事をこなしていく。そんなお話。一週間に一話更新が目安です。

第0品 キャラ紹介(前書き)

アニメを見て凄くハマってしまったからつい書いてしまいました。

皆さんに受け入れられるように頑張っていきたいです。

第0品 キャラ紹介

嬉野龍馬<うれしのりょうま>

容姿：漆黒の黒髪で肩越しぐらいまでの長さがある。ツヤツヤのストレートヘアで目の高さぐらいまで前髪がのびている。不良の様なツリ目でよくガラが悪いと言われる。体型は中肉中背。

身長：相馬より少し低いぐらい。

体重：身長相応。

性格：常識人でツツコミ要員。人に頼まれたことを嫌と言えない。

この物語の主人公。

種島ぼぶらのクラスメートである17歳。

ぼぶらにバイトを頼まれ、断われないそのままの流れでワグナリアの厨房係として働くことに。

料理が得意で、得意料理はチョコレートパフェ。

第0品 キャラ紹介（後書き）

「ええっ！？ ま、またウソなの龍馬！？」

B Y 種島ほぷら

第1品 ぼぶらの人選(前書き)

「はぁ……変態ばかりだなぁ……」

B y 嬉野龍馬

第1品 ぼぶらの人選

『種島』

『ん？ どうしたの佐藤さん？』

『今のワグナリア、厨房係が二人しかいないだろう？』

『そうだね。佐藤さんと相馬さんだけで頑張ってるよね』

『もう一人どっかから連れて来い』

『ふえ？』

『料理が上手い奴、お前の知り合いから一人連れて来いって言ったんだ』

『そんな急に！？ そんなこと言われても……料理が上手いってどれくらい上手だったらいいの？』

『そうだな……俺と相馬に匹敵するぐらいのレベルは必要だ』

『それってかなり高いよね！？ ううむ……あ』

『どうした。心当たりがあるのか？』

『うん！！ 私のクラスにすぐく料理が上手な男の子がいるの！
！ その子ならたぶんワグナリアで働いてくれると思うんだけど……』

……』

『何か問題があるのか？』

『その子、ちよつと変わってるんだけど……』

『それは大丈夫だ種島』

『ふえ？ 何で？』

『ワグナリアの連中、全員が全員変わり者だからな』

『あはは……』

今日は快晴。文句なしの快晴だ。いやー、いい天気だな。今日のオレは柄にもなく幸運なのかな？

あ。自己紹介が遅れたな。オレの名前は嬉野龍馬^{うれしのりょうま}。高校二年生の17歳だ。特技は料理かなあ？ま、そこら辺の料亭レベルなら何とかなるレベルだ。

そう。料理ができるんだ。だからなのか？

俺の目の前の幼女が意味不明なことを要求してくるのは……

「オイばぶら。もう一度言ってみてくれ。どう考えてもオレの聞き間違いだったと思うんだけど……」

「だーかーらー！ワグナリアの厨房係として働いてほしいって言ってるのー!!」

「……………」

「痛いっ!! 痛いよ龍馬!! 無言で髪の毛を掴んで持ち上げるのは止めてっついても言ってるよね!？」

「黙れ法律違反幼女。さっさと留置所にブチ込まれて来い」

「ひ、酷いよ龍馬!! 何もそこまで言わなくても……………」

「うるさい。オレはお前が嫌いなんだ」

「えええっ!？そ、そんなあ…………… 幼馴染なのに……………」

「ウソだ」

「ええええっ!!??? またウソなの!？ リョウマはいつつも私にウソばっかりついてえ!!」

「あっはははは!! 相変わらず面白えなばぶら!! あーっはっはっは!!」

「ひ、酷いよ龍馬あ」

口をとがらせてそっぽを向く俺の幼馴染。こいつは相変わらず中

身も外見も子供だなあ。……胸のデカさは何故か高校生レベルだけだ。

俺は、はあああああ と溜め息を一度吐く。

「ったく。お前、オレが絶対に断れないって分かっててそんなお願いしてきたんだろ?」

「うんっ!! 龍馬は昔から人の頼み事は断れないもんね!!」

「……………」

「いったあ

いつ!! い、いきなり何するのぉ!

?」

「その餅のようなほっぺを抓りたくなつた。すまねえな。オレ、料理人だからさ」

「そうなんだあ……………ってえ!! それを言い訳にして自分を正当化するのはいくれないよ!」

「うっせえ。もとはと言えばお前が無茶なお願いをしてるのが悪いんだろ?。少しは反省しろこの幼女」

「よ、幼女じゃないもん!! き、きつと大きくなるはずなんだもん!!」

「……………ハッ!」

「鼻で笑われた!」

露骨に大袈裟なりアクションを取ってくれるぽぶらに、思わず頬が緩んでしまう。

そんなオレを見て小動物の様にぽぶらが首を傾げている。ヤベエ。こんなことを考えてるってぽぶらにばれたら絶対に嫌われちまう……………

……………ッ!!

そつだ!! ここはさっきの頼みごとに話題を転換させて……………

「ぽ、ぽぶら。そのバイト先ってさ、今日中に面接に行けばいいのか?」

「え？　じゃあやっぱりバイトに入ってくれるの？（パアアアアア）」

くっ、眩しい！！　眩しすぎるぜぼらさんよお！！　その純粹な笑顔は心を袈裟切りにするから止めてくれ！！　可愛いけど……

「あ、ああ。オレもちょうど金を稼ぎたかったし、自分の料理がどこまで通用するのか試してみたかったしな」

「わぁーいつ！！　ありがとう龍馬ぁーっ！！（ぎゅっ）」

「ばっ……いきなり抱きつくんじゃねえ！！　ここにはクラスの連中がいるんだぞ！？」

そんなこんなでオレは、最愛の幼馴染の願いを断れずにバイトの面接へと出向くことになった。

「ココが龍馬に働いてもらうファミレス　『ワグナリア』だよっ！！」

ぼぶらに誘導されながらたどり着いたファミレス。ここがどうやらオレがこれから働くかもしれないファミレスのようだ。

外觀は何の変哲もない普通のファミレス。透明なガラスの窓から中を覗くが、別に変わりはない。

ふむ……これは案外普通の職場環境なのか？

「りよ、龍馬？ なにをしてるの……？」

「いや、お前が働くような場所だからな。異常がないか確かめていたんだ」

「へう！？ う、ウソだよな？ いつものようにウソだよな？」

「いや、これは本当」

「うわああああああああああん！！！！ 龍馬のばかあああああああ！！！！」

「ちよつ、おい！！ 泣くなって！！ こ、高校生はそんなことで

泣いたら子供って言われるんだぞ！！？」

「分かった。私泣かない。大人だから」

おおお……涙目で必死に泣くのを堪えてる……これは今まで見たことが無いぽぶらだな。

いつもいつも泣いてばっかだったぽぶらがここまで成長しているとは……これは、

「今後のぽぶらとの接し方を変えなきゃいけない……」

「ねえ龍馬？ 本音が口に出てるよ？」

さて。いつまでもこんなところに突っ立って話が進まないな。ぽぶらがいつも教室で楽しそうに話をしてくれるときにでてる不良な先輩とかやけに人の弱みを握っている先輩とかミニコンな後輩とかを見てみたいし、ココは早く面接に行くとしますかね。

「よし。じゃあ行こうぜぽぶら」

「行くだけなら別に襟首掴んで運ばなくてもいいでしょお

っ！？」

「合格だ」

えっと……いきなりすぎて状況が全然伝わっていないだろうから詳しく説明する。

オレはぼぶらを摘まんでワグナリアに入っていったんだ。店員専用の入り口からな。で、そこからぼぶらに案内されて厨房へと連れていかれたんだ。

そこに金髪の自棄に長身の人と青っぱい髪の優しそうな人が料理を作ってた、ぼぶらがその金髪の人のもとまでトテテと歩み寄ったかと思ったら耳打ちを初始めて……さっきの言葉に至るって訳だ。

「あのお……オレ、別に面接とかしてないんですけど……」

「大丈夫だ。どうせ面接なんかしても一緒だろうからな」

「え？ それは一体どういう意味
「聞くな」

「……………」

他人がおいそれと踏み入ってはいけない事情があるんだろう。オレも17歳で大人目の前の青年だ。それぐらいの空気は読める。

オレが苦笑いを金髪の人に返していると、ぼぶらがオレに手を取って、

「じゃあ龍馬。早く服に着替えておいでよ」

「え？ 今日から働くのか！？ 急すぎんだろ！！」

「え……嫌……なの？」

ぼぶらさんの涙目モード降臨。

「やるやらせてやらせてください！！ 服に着替えてこればいいんだろー!？」

「ほら新人。これがお前の厨房服だ。サイズは種島から聞いていたからピッタリのはずだ」

「なんでオレの服のサイズをこの幼女が知っていたのかは知りませんが…… 分かりました。じゃあぱーっと着替えてきます」

服を渡されたオレは、男子更衣室と書かれている部屋に入って着替えを始めた。

「うんっ。似合ってるよ龍馬!!」

制服を綺麗に畳んでバッグに詰め込み、白い いかにもコック！
！ と言わんばかりの服を纏ったオレは、厨房に戻った。で、そこで待っていたぼぶらがそんなことを言ってくれたんだ。

……うん。なんというかね。嬉しいんだけど…… 幼女に言われたって事実がオレの中の嬉しさを減らしてるっていうか…… ま、いいや。

「サンキューな。で、えっと……」

「俺は佐藤だ。佐藤潤。好きなように呼んでくれて構わない」

えっと、金髪の先輩が佐藤潤先輩か。まあ、佐藤先輩と呼ぶのがベストだろう。

「俺は相馬博臣。ワグナリアのみんなは俺のことを名字で呼んでいいよ」

青っぽい髪先輩が相馬博臣先輩か……まあ、ココも無難に相馬先輩だろうな。

それにしても……この相馬先輩、どこか親近感が沸くんだが……

……

「相馬先輩」

「なんだい？ 嬉野くん」

「人の弱みは？」

「付け入るべし」

「同士ですね先輩。オレ、そういう人が大好きっす」

「あ、あははー……やっぱり変わった人だったね嬉野くん……」

さて。同士の先輩も見つけたことだし次の先輩を探しに行こう。

厨房には佐藤先輩と相馬先輩の二人しかいないようだ。後はホールにもいるんじゃないか？

「ぼぶら。残りの従業員の人ってホールにいるのか？」

「うんっ。店長も多分ホールでパフェを食べていると思うけど……」

「なんで店長が店のモン食ってんだよ！！」

「し、知らないもん！！いつも店長はお腹を空かせているからしようがないんだもん！！」

「それもそれでどうなんだよ！！」

まあ、いいや。早く自己紹介終わらせて、厨房で料理作ろう。そうじゃないと来た意味がねえ。

オレは相馬先輩と佐藤先輩にもう一度挨拶をし、ぽぷらと共にホールへと移動した。

「今日からここで働くことになりました。嬉野龍馬です。歳は17で」

「龍馬はここで週に7日のシフトで入ってくれるんだよ!!」

「そうそう週に7日　　ってえオイ!!　多すぎだろ!!　休む暇が全くねえじゃねえか!!　そんな週に七日のシフト組んでるやつなんているわけねえだろうが!!」

そんな奴がいたらすでに訴えているはずだ。労働基準法とか完全に無視したシフトだからな。訴えるぐらいは既にしているハズ。

「じゃ、じゃあ、かたなくんから自己紹介をしてくれる?」

「はい先輩!!」

先輩……ということとはコイツが例のミニコン高校生ということだろうか?　頭をなでる天才で変態の……

でもそんな風には見えねえなあ。丸メガネをかけてていかにも真

面目そんな風立ち。こんな真面目そんな奴が変態だなんてやっぱり信じ難

「俺は小鳥遊宗太です。好きなものは小っちゃいもので嫌いなものは12歳以上の年増と大きいものです」

くはないな。やっぱりコイツも変態だ。

「私は伊波まひるです。よ、よろしくおねがいます。えっと、苦手なものは」

可愛い人だなあ。美人ですらーっとしてるし、どっかの少女とはやっぱりどこかオーラが違うって言うかね……この人、話し方から察するにかなり人付き合いが苦手そうな人だよなあ。うんうん。いい心がけだ。バイトを通じて人付き合いに慣れようって思ってるんだろうなあ……

「男性です!!」

「やっぱりアンタも変態だああああああああああああああああああああ!!」

「え、えええっ!?! いきなり変態呼ばわり!?!」

「ちよつと龍馬!! それは流石に酷いんじゃないかな!?!」

「だって!! ミニコンとか男性恐怖症とか普通じゃねえ連中はつかじゃねえかよ!!」

「そ、そうだけど!!」

「否定すらしてもらえなかった!?!」

ダメだ。働く気はあるけど疲労困憊して勉学に身が入らなくなる自信に満ち溢れてきた。オレ、本当にここで働いていいのかなあ?
(主に自分の身を案じて)

「じ、自己紹介を続けるね!! えっと、そっちのパフェを食べている人が店長だよっ」

「…………… ああ、お前が佐藤が募集したとか言う新人か。これからピシシ働けよ」

ツッコまない。ツッコまないぞ。ココでくじけたらここで働くな
んて夢のまた夢。オレは一步大きく成長するんだ。短気じゃない…
…オレは短気じゃない……

「で、最後にその人がチーフの轟八千代さん!!」

「よろしくね、嬉野くん」

うん。確かにきれいな人だ。おっとりとした物腰で目つきも柔らかい。いかにも世話好きって感じの女性だ。

ただ……………ただ……………

この人の腰に日本刀が帯刀されているのはどうしてなんだろう？

ツッコんだら負けなのか!? あれはツッコミ待ちなのか!?
今日で一番の変態が今、オレの前で挨拶をしている。ダメだ……………マ
ジで身が持たねえよ。

「……………よろしくおねがいます」

幸先不安お先真つ暗なオレのワグナリア生活が、幕を開けた。

第1品 ぼぶらの人選（後書き）

「嬉野くん、料理上手だねえ」

B y 相馬博臣

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1531ba/>

WORKING!! 今日から何故かワグナリア

2012年1月4日10時54分発行